

筑前國續風土記 卷之十五目錄

遠賀郡下

黒崎

妙見社以下大歳社に至るまで、黒崎の境内にあり。

熊手權現

岡

田

諏訪大明神

祇園社

山寺村

三神山

大塚

錢屋圃

古館

大歳社初浦にもあり。以上黒崎の内。

皿倉山

枝光村

尾倉村八幡宮

鳥旗

名籠屋崎

中原村

島郷是より以下至末、皆島郷に屬す。

浪懸岸

茶臼山廣所山附

狩尾大明神

洞山

板敷並石橋

山鹿岬

馬浦烏帽子岩

脇田洞山

逆見津

白島

小嶽村白山權現、社十三塚

小石村

若松

河蚪島

資波島

大渡川

修多羅村

藤木村

石峯

二子島

彌勒山

海士住

洞海

大鳥居村

椎木淵

庄江

皇后淵

有毛野

筑前國續風土記 卷之十五

貝原篤信選定

貝原好古編錄

竹田定直校正

遠賀郡 下

○黒 崎

此地は本州の東北の端に在て、豊前小倉に近き往來の宿驛なれば、關所を置て非常をいましめ、婦女は券契けんぎなくして他國へ通る事をゆるさず。黒崎の古城は藤田にあり。此城は長政公入國の後、豊前境の守禦のため築せられ、家臣井上周防之房に二萬石の采地を賜り。當郡の事を司らしめて、此城に置おかる。此時までは此町を黒崎とは稱せず。其比此城山の南の下に、農人の宅一區あり。其所を黒崎と云。是に依て城の名を黒崎と名付けるとかや。周防此所に在城し、其家人等多く此所に宅をしめ、商賈も集りて藤

田、田町の兩町たり。是よりして此所の町の號も、城の名によりて黒崎くろさき云。熊手町には、むかし毎月市立ける故、町の西を下市しもと云。東を上市かみと云。延喜式、筑前國驛程えきていの部に、浪崎と云所あり。いにしへより此邊の町を熊手と號す。隈崎は即此所なるが、此城元和元年に台命有て、一國一城に成し時破却せらる。又むかしは大坂往來の渡海船、豊前小倉のみに在て、當國他國より上京の人、或は伊勢に參宮する人、皆小倉に行て船をかりてのれり。近年は黒崎にも亦渡海船あまた出來、此所より船にのりて上下する者多し。其舟入は黒崎の城あとの西にあり。

○妙見社

黒崎の城山の東に小山あり。妙見山と云。西のふもとに妙見の社あり。

○熊手權現

熊手村にあり。祭る所の神三座、第一殿大國主神、第二殿縣主神あがたのし、第三殿少彥名命すくなひこな也。縣主神とは岡の

縣主の祖熊鰐を祭ると云。むかしは大社なりしが、大友氏の爲に焼れて、御旅所、鐘樓・反橋、馬場など田圃と成て、むなく其名をとめたり。御手洗の清水あり、濁穢じよくまの男女此清水を汲時は色變じ、或は濁水となるといへり。井上氏家人坂本何某、石を置て清水上下に分ち、上水を以て御手洗とし、下水を以て里人の用水とせり。末社のあと多し残り、なほ形許に傳たりるもあり。神領の地、熊手、引野、穴生の内にありしが、今に至りて田の字あざなとなりて、其名多くのこれり。山寺村の下の海邊に、貞元と號して、民家八九軒許ある所あり。是も熊手村の境内なり。其地にむかし熊手權現の鳥居有しと云傳たり。今はなし。其邊にて昔夏越なごしの祓はらへを修行せしと云。其遺風にて、今に至るまで六月晦日には、村民熊手の祠官をたのみ、麻の葉にて祓をなさしめ、里人は海水にて身を洗ひ、牛馬にも潮の水をそぐとかや。

○岡 田

熊手村の内、山寺と云所にあり。古事記に、神武天皇
豊前の宇佐より筑紫の岡田宮にいたり、一年ましま
すと記せり。岡の水門に來り給ふよし、日本紀に見
え侍れば、岡の水門より此所に來り、一年とゞまり
玉へるにや。一説に、岡田の宮は御笠郡原田村にあり
と云。されども岡の湊にちかければ、此所を正とすべ
きか。昔は神社ありしが、今もむかしの社の址とて、
二三段許なる所あり。四方に堀あり。社の址の地を
ほれば、小石一面に廣くしげり。大友宗麟此邊の神
社を焼れし時、焦土となりぬ。然れども其神社をば、
今も熊手權現の社内に祭る。また山寺の下海邊ちか
き所に、王屋敷の址と云傳ふる所あり。又其下の海
邊に皇后崎と云所あり。是れ神功皇后の大濟より入
て、洞海へ通り玉ひし時、しばらくとゞまり給ひし
にや。

○諏訪大明神

熊手村にあり。是は麻生氏の先祖、宇都宮何某始て

此所に勸請せしとかや。むかしは、いさぎよき宮作にて、祭禮の時は麻生氏、鶴鹿を神前にそなへて祭しと云。其の外流鎬馬猿樂など執行せしといへども、今はみな廢絶す。天正年中兵火によりて焼失して、彌衰すゐ廢はいの地となれり。入海の中に夫婦石あり。是はむかし鳥居の立たりし地なりと云。

○祇園社

昔は藤田の枝村、上かみの名みやうと云所、皿倉山の下にあり。延寶年中藤田の町うしろの後に移せり。むかし社の在し所、今も祇園原と云廣原くわうげんなり。是むかし麻生氏の創立せし社也。祇園、及山王權現、春日大明神凡三座を祭る。

石の鳥居、元祿十四年村民建之。

○山寺

熊手村の枝村なり。故に前熊手と號す。むかし此所に寺院多かりし故、今に至て山寺と云。桂呂院、養釋開藏菴、徑竹菴など云地の名殘れり。いかなる寺なりしにや。今は其事實明ならず。

○三神山

熊手村の内、山寺の下貞元と云所に池あり。其池の中に小山あり。是を蓬萊、方丈、瀛州えいしゅうの三神山と云。此所いかなる人の住けるにや、記録園、御園、など云所あり。

○大塚

山寺と貞元の間、周七八町わななり許はかりある大塚あり。これは麻生氏の塚なりと云、里人御廟所のもと、稱す。村人は今も此ところにて、馬より下りて禮をなす。

○錢屋圃はたり

熊手村にあり。いつの比の事にや。昔此所にて錢を鑄けると云。其錢の銘は、元通國吉と有しとかや。

○古館

藤田村に宅の址二箇所あり。一所は麻生四郎兵衛、一所は麻生治部少輔と云し者の宅址なり。是皆麻生氏家臣也。此宅の址ある故に古館と云。又藤田村の中に紅梅地藏堂とて有。是は麻生氏家人紅梅と云女

死せしを、葬たる所なりといふ。いかなる故に地藏と號せしや。

○大 歳 社

熊手村山寺の下の海邊、大歳と云所にある小社なり。是素盞鳴尊すさのをの御子、大歳の神を祭る所なり。むかしは大社にして、毎年正月十五日に穗垂ほたれの祭とて、年穀ほうけうの豊凶を占ふ祭あり。其法は炊殿かしぎどにて粥を煮、早稻・中稻、晚稻の名を各小竹の筒に書しるし。釜中の粥に入て是を煮る。筒の中に飯粒の多くいるを以て、其秋の穀のみのりを知る。其外田圃に蟲の災ある時など、祈て必驗ありしと云。今も農民尊仰してかたばかりの祭をなす。昔は大祭執行有しと云傳へしが、今も其邊の土中をほれば、昔の祭具さいぐ多くうづもれり。

○皿 倉 山

前田村、尾倉村の上にあり。郡中第一の高山なり。山上の岩に蠣殻かきがら多くつけり。夜須郡古所山にあるが如し。皿倉山より杉山はひさく、杉山より帆柱山はひさ

し。皿倉山は東にあり。杉山は中にあり。帆柱山は西にあり。此三の山は、ならびたる高山なり。

○枝 光^{みつ} 村

此村は黒崎の東、豊前の方一里餘にあり。村の上なる山に諏訪大明神の社あり。依て此山を諏訪山と云。昔は大社なりしが、野火入て焼失せり。其後小社を建て、今にあり。七月廿七日祭禮あり。むかし村下の濱邊の山に八幡の社ありしと云。今は圃^{はたけ}となれども、なほ其所を下の宮と云。此宮所より三四町許北に、中富と云ふ小島あり。其島に道祖神^{さへのかみ}の社あり。八月十五日、八幡宮祭禮の時、此中富に神幸有て、其濱にて流鏑馬ありしとかや。廿年^{にせき}以前より其島に新田出来、今は陸につけり。むかしは此八幡宮頽^{たは}破せし時、村中にうつせしを、其後又破損せしかば、宮所よろしからずとて、寛文五年、諏訪山に移して、諏訪大明神と相殿に祭り奉る。此二神ともに麻生氏下野國宇都宮より勸請せしと云。諏訪のやしるに貴

船明神をも祭れり。又村中の田の字に大歳と云所あり。其所に小き叢祠ほくらあり。是をも大歳大明神の社といふ。此村の北の海邊に牧山とて松山あり。其牧山に近き小島を松が島と云。又はだか島とも號す。石ばかりあるを俵子島たわらこといふ。又茅すきの生ずる二の小島を、中島、端の島と云。俵子島と三ツ相ならべり。

○尾倉村八幡宮

御社は村より西、往來の道の側かたはらなる山にあり。いつの時より鎮座し給へるにや、詳ならず。むかしは大社にて、八月廿五日の祭には、神輿御幸有しとかや。濱椿と云て、今も御旅所の址あり。又神幸の道筋、今に至て田の中に形許かたはかりに残れり。御幸の時、村中に其年作れる苧をにて布を織ざるものは、機はたを擔になはしめて、神輿の御さきに行しめけるとかや。是女功をはげましむる戒ならし。今も其遺例にて、村中の女、祭り前にかならず布を織るとぞ。又昔流鏑馬ありし馬場の址ものこれり。

○鳥と旗はた

若松村の向なる村なり。其間に入海有て、舟にて渡る。今は戸畑と書く。然れども萬葉集の仙覺抄に、筑前風土記を引て、鳥旗とあれば、是を正字とすべし。

○名籠屋崎なこや

鳥旗村の東北海際にあり。平地にして出崎なり。若松村の北にも出崎あり。小田崎と云。名籠屋崎と海をへだて、南北に相對せり。日本紀、仲哀天皇紀に、名籠屋大濟わたを以て西門とすとあるは、則此所の事なり。此地に神社あり。猿田彥命さるだひこのと稱す。

○中原村

鳥旗村の東方にある隣邑となりむらにして、豊前にさかへり。村の東に長六百間、横二百四十間許の廣き原あり。
(此村云云以兼トス迄二本ニ缺ク)
豊前いたうづ到津村に近し。此村に卜者三人有。陰陽師と稱す。其祖しれず。系圖なし。凡國中に陰陽師五十人許有。又方言に卜者をば博士と稱するは、古へ陰陽

博士有て占を司し故、それを轉じて、あやまり稱する成べし。村々に廻り行て、家々の禍福を占ふを以業とす。近きころ此村に嘉右衛門入道休白といふ卜者はくしゃあり。其父嘉右衛門も、とより占をよくする名あり。休白其業を受つぎ、數郡の人に信ぜられたり。天性篤實とくじつにして質直しつちよくなり。父嘉右衛門に仕へて至孝あり。常に父の側かたはらに侍りて、日夜はなるゝ時なし。國主の祈禱にこもりし時、二夜三日別れ居たりしより外、一生父にはなれず。夜も父の寢所ねどころをうかいひてやすくいねず。父の寢覺の時は安否をとひ。ねむれる時はねいきをうかいひて、夜々おこたる事なし。父も亦子を愛して、ねざめには子の安否をとふ。休白若き時より父の心をよろこばしむるを以て至樂しらくとし、かりにも父の心にたがふを至惡とす。其餘は皆我身の得失をわすれたり。其家賣卜はいはくをわざとすれども、もとより耕作をいとなめり。或時苗をうふる比、我家里より隣村までの田夫を雇やとひあつめ、今日一日に

つとめて田をうへ、時におくれじと、いそがはしき折
ふし、父の嘉右衛門豊前の小倉へ行てあそばんと思
ひ、けふは田植日なれば、汝^{休白}は留りて田を能うへ
させよと云、是より小倉は路程只一里ありて近く、
路次も平にて、何のうれへもなければ、汝常のごと
く我にしたがひ來るべからずといふ、されども休曰、
父ひとりやりて、みづからとゞまる事あたはず。父け
ふは田うへ日なれば、明日行給へといへば、今日父の
ゆかんと思ふ心にそむく事甚罪ふかく、おそれてさ
はいはず。つひに田うへの人を多く雇^{やと}ひながら、父
の供して小倉に行て遊べり。凡父に仕ふるには、家事
のさはりなど少もこゝろにかけず、只父の心にした
がふを以てたのしみとす。後に父病に臥て、凡七十七
日にして身まかりぬ。其間休白日夜そばをはなれず
して父につかへ、夜もいぬる事まれなり。父死て哀^{あい}
戚^{せき}のいたれる事、たとへていはんかたなし、休白も元
祿元年に壽七十三にて死せり。子なくして族姪其あ

とをつぐ。休白先祖より傳れる姓氏も有べきなれど、
我に氏なしとて名のらず。時人只中原の休白と稱せ
り。心づきなき者は、あまねく其の孝を感ずるには
あらで、只何事にも偽なきをのみ感じ、賤き者なれ
ど、しるもしらぬも是をうやまへり。少より老に至ま
で、親をしたふ事みどり子の如し。是徳性の自然に出
て、まなばずつとめず、自悦樂して行ひしなり。人あ
りて其孝行を尋るに、只我は孝ならずとのみこたへ
て、我が孝をかたらず。凡世に孝子多しといへども、
かゝる至性の人はまれなるべきかな。

○島

郷がう 是より以下島郷の事をしるす。此島は遠賀の北に在て、其間に洞の海をへだつて

山鹿より若松まで長五里、横一里、村數十五、田畑
高七千石あり。若松より海士住あますみまでの間、入海の南北
のわたり半里許あり。此海は遠賀川の末にて、淡鹹たんかんま
じれり。故に是ほどの廣川他國にはなし。依之大渡
り川と云。名所也。又海士住より麓までの間は、海の
わたり甚せばし。尤せばき所は四五間許あり。かくの

如くせばき海は、他方にてはいまだ見ざる所なり。同じく海についきぬれど、大わたり川と名付し所は、大に廣く、洞の海と名づけし所は、きはめてせばし。此二事は常に異なりと云べし。島郷と名付しは、内には入海とほり、外には大海をうけて、めぐりは皆海なる故に島郷と云。島郷の村の名、東より西につらなる事、左にしるすが如し。若松、修多羅、藤木、二島、多田、頼田の枝村、頼田、竹並、海士住、有毛、大鳥居、乙丸、高洲、山鹿の山鹿、此十三村は、山より南の方内海の邊にあり。又西の方よりかぞへて柏原、山鹿の枝村、岩屋、有毛の枝村、安屋、脇田、安屋の枝村、小嶽、小嶽の枝村、脇浦、小嶽の枝村、小石、此七村は山より北の方にあり。海に近し。北の方をゆけば、山鹿より岩屋へ一里、岩屋より脇田へ一里、脇田より脇浦へ一里、脇浦より小石へ一里、小石より若松へ一里あり。山鹿より若松まで、すべて五里なり。長き島なり。

○浪懸かけの岸

山鹿村の境内にあり。山鹿浦の乾^{いんわ}の方五町ばかり、柏原村に近き所に、浪懸と云所二あり。一は山の側^{かたよら}の岸なり。岩所々に出入ありて凸凹^{とつあう}なり。里人は是を大浪懸と云。又其少西なる磯^{いそ}ぎはに長き岩の岸あり。是を小浪懸といふ。大浪懸は潮干には水遠し。潮みちたる時、西風あらければ波かゝる。小浪懸は潮みちたる時は、潮にかくる。潮干たる時、西風あらければ波かゝる。凡海邊の岸に波かゝる所珍しからず。然るに取わけ、此所を浪懸の岸と名付しは、此大浪懸、小浪懸のある所は、西北をうけて湊口^{みなと}にさし出たる所なり。西北の風はげしき時は、此湊口より大浪よせ來たりて、波甚しく懸る事、他にことなればなり。

懷中抄

我袖のぬるゝをなにゝたとへまし

波かけの岸世になかりせば

祐

舉

夫木

松のねにあらはれにけり年を経て

いかでくづれぬ浪かけのきし

大貳 高遠

同

浪かけのうらのねざめにいとゞしく

ものおもひそふかりがねの聲

○茶 臼 山 廬所山附

山鹿^が村より東に當れり。安徳天皇此所に居給ひし時、鐘をかけられし松といひ傳へ、鐘掛松とて今に此山にあり。又山鹿村より北に當りて小山あり。土民は是を御廬所と云。山鹿城主麻生氏、元祖より十五代の嫡流、上野介興壽^{おき}の男子の墓也といひ傳へたり。凡民俗は、墓所を名付て廬所といふ。

○狩尾大明神

山鹿村にあり。島郷の惣社なり。祭る所の神は、石清^{いはし}水の地主の神、大國玉神を勧請する所なり。社は村より北なる小山の上に在て、佳景の地也。

○洞^{ほら} 山^{やま}

山鹿の北柏原浦の西一町ばかり、海を隔て小島あり。堂^{だう}山と云。其上に蛭子^{ひるこ}神社あり。又地藏堂有。其西

海邊のひき、所、廣き岩の間に潮入所あり。掘きりたるが如し。横二間許あり。長し。潮みちたる時は、舟ならでは渡りがたし。其西に又島あり。其島の内に洞山ほらあり。洞の内高さ三間半、横三間半、長十一間有て、南北に通つうぜり。奇境なり。二の島ともに柏原村に屬す。凡國中に洞山三所あり。此地及脇田村と糟屋郡藍島のはなぐり島なり。凡洞とは、山のかたはらに大穴有て、うら表通りたるをいふ。もろこしには洞多く、本邦には稀也。

○板敷並石橋しやくきやう

是も柏原の西、堂山の西の島の内にあり。柏原に屬せり。板敷は海中に長く出たる岩にして、その平なる事あだかも恰板を敷たるがごとし。故に其名とす。長三十二間半、横十二間半十二イあり。石橋は其東北の側かたはらにあり。村俗は、さけうと云。是石橋しやくきやうをとなへあやまれるなり。入江八間あり。其上に天成てんせいの石橋あり。幅一尺五寸、長一丈、高五尺三寸（一三三三寸）有て、人のわたせる橋の如し。其

上を人ふみて渡る。洞山、板敷、石橋、三の物造化ぎょうくわの
巧妙たくみにして、異ことなる境地なり。かやうの天工の石橋
は、他國にも多く有べからず。豊前羅漢らかんの石橋二よ
り外いまだ見ず。

○山鹿岬

山鹿村の北一里に岩屋村あり。有毛村に屬す。其北
なる出崎を岩屋崎といふ。是山鹿の岬みさきなり。昔此邊
をすべて山鹿と云けるならし。日本紀に、仲哀天皇
八年春正月、天皇筑紫に下り給ふ。是時山鹿の岬と
り廻りて、岡浦に至りますとかけるも、此所の事な
り。岡の浦は蘆屋なり。

過山鹿三崎一詠

蓮

禪

雲海沉沉望自由。聞チ名蓬島不ニ遙求ニ。潮穿沙岸松
根露。廬守ハレ山畦チ稻穗秋ナリ。渺々望山河。處々有田畝。稻
及デ老何堪羈旅路。當チ晴遞ニカニ見往來舟。未ニ全衣チ錦ナ
歸ラ郷土ニ。舊友莫レ嘲ル貧薄愁。無題詩集に出る

○馬の浦 烏帽子岩

岩屋浦の東の海にあり。岩の平かなる事^{あたかも}恰馬場の如し。長百間餘、其内長六十五間許は横十二間あり。長三十五間許は横三間あり。又此邊の海濱に、烏帽子の形^{かたち}に似たる立岩あり。是亦奇境^{ききやう}なり。

○脇田洞山^{ほら}

脇田浦の西に洞山あり。洞口方一間半、窟^{いはや}の内おくへ入事五間許、岩を熊^{くま}とうがてるが如し。山鹿の洞より小なれども、奇異なる所なり。又其東に大なる岩窟^{いはや}あり。穴の口是も一間半、おくへ入事五間許あり。又其邊に、もちろくといふ岩山あり。長六間、横三間許、窟穴あり。是亦奇境也。洞山の西に艦櫓^{ともしろ}と云所あり。

○逆見津^{さかみづ}

岩屋と脇田^{わき}との間にあり。潮のかはる所なり。是より潮東西に分るゝつじなり。凡福岡より大阪に上る海路に、潮のかはるところ所々にあり。海中の地勢高下によれるなるべし。此所及周防のさうし、備後の

白石など、共に潮のかはる所なり。かはるとは上下に潮のわかれて、みち引する所なり。日本紀に、逆見の海を鹽地しほのどきとすとあり。此所の事にや。一説には、長門國武久村の澳を逆見海と云といへり。島郷の内海にては、庄の口と云所に潮のかはる所あり。逆見津のとほり也。

○白しら 島

脇田脇浦の海の澳おきにある二島なり。二島をすべて白島と云。東にあるを雄島おと云、西にあるを雌島めと云。

雄島は其周廿一町十九間。雌島は其周十町あり。其間相去事六町半有。雄島おは岩

石多く土少し。柴木茂く多し。其東南の方海邊に、高さ石壁横五十間許あり。其傍の石に、綠青方二間許なる所あり。里民傳へて曰、有^レ金故綠青生ずと、其青き事甚し。雌島めは其地高からず。林木なし。野牛やぎ多し。日本紀仲哀紀に、柴島しばしまを割て御廬みなととすと有^レ柴島は此白島の事ならんか。柴多く生ずる故に、柴島といひしを、後にいひ轉てんじて白島と云けるにや。白

と柴と其訓相近ければなり。又若松の入海にある嶋をも資波嶋しはと云。風土記に出たり。然れども是は狭き入海の中に在て、あらはれざる所なれば、御願うねんとするとはいひがたからんか。昔毛利元就筑紫に渡り給ひし時、この白嶋より十八丁澳の、かべと云所に船をつながれしが、元就乗船の碇いかだ、海中の岩背せにかゝりて上らず。時に脇田浦わしたうらに水練れんの達者有けるが、彼所十七尋ひろありける海底に入て取上げる。元就斜ならず感悦し、白嶋を永代彼者にたまはりぬ。其子孫脇田脇の浦に居て、兩所より此嶋をわかつて領しける故、今に至まで、兩所より是を領せり。此白嶋に白瀧權現社、應瀬明神社あり。昔年長門國の者、此島は彼國の内なりとて、毎年來り祭禮の事に預らんとす。脇田脇浦の者これを制しけれどもうけごはず。又かさねて來りし故、脇田脇浦の者は是れを見て鬭諍とうさうに及び、終に長門國の者七人を其場にて打殺しぬ。是よりして彼國の者の諍論さうろんはやみぬ。然れども彼七人の者の靈魂れいこん崇たかをな

しけるにや。七の塚を築き、邪神とし、毎年六月にこれを祭る。

○小嶽村 白山權現社、十三塚

小嶽村の山上に白山權現の社あり。是伊弉册尊くわみ菊理姫を祭る所なり。麻生兵部大輔宇津宮の白山權現を勸請せりと云。昔はさばかりの大社なりしにや。此社の鳥居を立たる所を、今も大鳥居と號して、村の名とす。此村は内小嶽外小嶽ほかにたりとて、南北兩村あり。内小嶽を本村とし、外小嶽を枝村とす。小嶽の高き山は、内小嶽の北、外小嶽の南にあり。又小嶽の南のふもとに熊野權現の社あり。むかしは此社に社僧八坊有しとて、其宅址村中に残れり。其八坊は院主坊、辻坊、西坊、阿闍井坊、此外一坊ありしと云。又小嶽と脇浦の間、白山の社の西に、十三塚ならびつらなれり。

○小石村

初は越石こいしとかけり。今は小石とかく。脇浦より小石までの間石原なり。故に越石といへるにや。

○若 松

町あり。民家多し。是當國東北の端に在て、豊前長門凡上方への渡口なり。むかしは修多羅村の枝村なりしが、長政公入國の後、別村となる。宗祇が筑紫紀行に曰、うつり行て筑前國若松の浦といふにつきぬ。則此所をしる人麻生の何某兄弟、ある寺にむかへとりぬ。かた山かけてうへ木たかきかげあり。内外の海を見るに、鹽屋のけぶり、くれわたる入、日影に移ろふほど、又いふかたなし。此二人は將軍家に奉公の人に侍れば、都の物語こまやかにして、いろ／＼のさかなもとめ出たるほど、こよろぎのいそがはしさも思ひやらる。さかづきかさなり、さし更る月のひかりもたいならず、今宵は十三夜なれば、發句

名やおもふ今宵しぐれぬ秋の月

この時宗祇が宿せし寺は、正法寺といふ禪寺なり。今は廢してなし。長政公入國の後、此所に飛船數十艘をつなぎ、舟司舟人等多く置て、急用に備へらる。

是は芦屋洋は風あらしきは、舟の往來成がたき故、此所より使の人を舟にのせて、大坂に遣すべき爲なり。

○河^か 蚪^は 島

仙覺が萬葉集の註を案ずるに、筑前國風土記を引て、鳥旗^{とまた}の海中に兩^{ふたつ}の小島あり。其一を河蚪島と云。島に支子を生ず。支子はくちなしなり。海に鮑魚を出。其一を資波島と云。兩島ともに鳥葛^{うかつ}、冬薑^{きやう}を生ず。鳥葛は黒葛なり。冬薑は淫菜也とあり。今案ずるに、若松と鳥旗との間にある島を中島と云。是則河蚪島なるべし。島の内に神社佛堂なし。此中島を長政公入國の後、城を築て中島城と號し、家從三宅若狹を置れしが、大坂陣の後元和元年、公命によりて城を破らる。

○資^し 波^は 島

中島の數町西に葛島^{かつら}と云あり。中島に比すれば大なり。葛多し。是風土記にしるせし資波島なるべし。葛島の西南に小島三あり。葛島に比すれば甚小也。

○大 渡 川

若松の入海の口、若松と鳥旗との間なり。遠賀川の水、蘆屋の東三頭みつかしらと云所より、西の方蘆屋に流れ、又三頭より東へもわかれて、若松へながれ出る事川の如くなれば、大渡川と云ふ。日本紀、仲哀天皇の紀にも、名籠屋なごや・大濟わたリを以て西門とすとあり。名籠屋なごやは若松のむかひ、鳥旗村の出崎なり。大渡にちかし。藻鹽草にも、大渡川筑前にあるよし記せり。

貫 之

古今六帖

つくしなる大わたり川おほかたは

我ひとりのみわたる浮世か

この川は神功皇后の御船の通りし所なり。凡甚しき嚴寒げんかんの時、大川はこほれども、海はこほらず。然るに此先慶長年中に一度、寛永年中に一度、此水こほれり。又天和二年十一月晦日より雪ふり、しはすの四五日まで、寒氣はげしき時、いづれの川も皆こほりし時、此水もこほりて、舟の往來たえたり。慶長よりさきの事はさかず。此所入海なれど、遠賀の水もこゝに

出て、鹹淡相まじはれり。故に川とひとしく氷となれり。大渡川と稱するも、又むべならずや。此川若松より海士住の間は、其わたり所により、少廣狹あれども、凡十五町廿町許あり。其水上の遠賀川は、其廣き事淀川、千年川、其餘の大河に及ばずといへども、此川は入海にて、鹹淡相まじりぬれば、其廣き事かくのごとし。是天下第一の大河にも勝るべし。若松より海士住までの間、すべて大渡川なるべし。

○修多羅村

此村は東南の方海にむかへり。若松村・小石村・藤木村、皆修多羅村の枝村也。長政公入國の後各別村とせらる。昔此村に修多羅山宗善寺と云寺有しとかや。修多羅とは、佛經の梵語也。修多羅村の北小田山に、十三塚つらなれり。小石と修多羅の間なり。筑後久留米の城主有馬玄蕃頭より長政公に乞て、上方往來の爲に此所に早舟を多くつなぎ、船頭水主をも置れけるが、忠之公の時、寛永の初より此所に渡舟をおかれず。其後豊前柳ヶ浦に舟をつなぐ。

○藤木村

若松と二島との間、山の南の側に在て、其境内一里あり。長き里なり。

○石 峯

藤木村の上にあり。上に大石ある故に石峯と名づく、島郷にて第一の高山なり。次に畠田村の上の彌勒山みろく高し。次に小嶽山なり。

○二 子 島

二島村にあり。黒崎の向ひに小島二あり。其故に村の名をも二島と云。二島各周九十間許ありて、其四方の峯嶮くして躋のぼり難し。矢筈竹多し。大なる蛇あり。

○彌み 勒ろく 山

畠田村の上にあり。山上に彌勒堂あり。頗高山なり。

○海あ 士ま 住すま

竹並たけなみ海士住の前なる斥がたに、元祿元年新田多く出来たり。竹並の前に新村出来柳川と云。海士住（イ其長八百廿間あり）に屬す。それより小島といふ所まで十數町の間堤をつき、其所を新田とす。水

門二あり。むかひの枕崎の土石を用て堤を築けり。(今新田凡五十餘町有)

○洞くまの海うみ

若松より蘆屋に至るまでの間入海あり。若松より海士住までは、海の南北廣き事半里許あり。海士住より淺川の西までは、山間にて海のわたり甚せばし。

狹き所は六七間、尤狹き所は四五間あり。大舟は通らず。是を洞海と云。凡くきとは狹き所に水の通ずるを云。水莖の岡の湊と云も此意なり。日本紀に、

仲哀天皇八年春正月、天皇筑紫に幸し給ふ時、神功

皇后は別舟にして、洞の海より入玉ふ。若松の方より大渡川を通り

玉いしなるべし。潮涸て御船進む事を得ず。時に岡の縣主熊鰐

更に歸りて、洞の海より皇后をむかへ奉り。則御舟の

進ざるを見て惶懼かしこまりて、忽に魚沼いけ池を作り、悉く魚

鳥をあつむ、皇后此魚鳥の遊ぶを見そなはして、忿いかりの

心稍解給ひぬ。潮しほの満るに及て御舟進て、則岡津に

泊り玉ふといへり。潮干て皇后の御舟進ざりし所は、

海士住の新村の邊、新田の内七反田と云所に、鵜巢うのす

と云岩の背^せあり。此所に御舟すはりす、まざりし由、

むかしより云傳へたりと、(魚沼云云邊ナラン迄一本ニ載ス)村老語れり。魚沼鳥池を

作りし所も、此山の下今の新村の邊ならん。此所は

昔潮の入口なり。貞享年中に、此地新田となりしに、

其所に清泉出づ。今新村^{はらひ}祓川村の民、此水を以、酒を

釀^{かも}すに味甚よし。郡中第一と稱す。此所入海にて清

泉の有べきとも見えざるに、かゝる水あるは是魚沼

鳥沼のありし跡なるべし。新田とならざる前は、清

泉ある所より、猶三町ばかり山際までは潮満入し故、

清泉は潮水の中にありて顯れざりしなり。其上の山

平なる所に古松三株あり。是を御輿かけの松といふ。

此所神功皇后の御輿をかけし所と云。皇后潮のみち

し間、しばらく此所にとまり、魚鳥の遊ぶを見て、

御心をなぐさめたまひし故、其間御輿をこゝにかけ

たりしにや。古松三株の内、二株は大風にたふれて、

今は一株のみ残れり。又手野村の松原の内に池大小

二あり。こゝが池と云。是則魚沼^{いづみ}鳥池ならんかと

いふ者あり。然ども此所は洞の海より甚遠く、方角
ちがへり。且潮の干たる間は、久からざる物なれば、
かゝる大池は、にはかに作るべからず。皆牽合けんがふせる虚きょ
説なれば必信すべからず。にはかなる事なれば、唯
御船のとまりし洞の海の入口のほとり、海士住のあ
たりに、たちまちに作れる小池なるべし。いとかりそ
めの事なれば、其跡後代までは残るべからず。豊臣
秀吉公朝鮮征伐のため、肥前名護屋に下り給ふ時、
神功皇后のあとをしたひ玉へるよし、語り傳へ侍れ
ば、昔の吉例を思ひ出て、洞の海を通り玉ひしにや。

○大鳥居村

むかし麻生氏小岳山の上に、宇都宮の白山権現を勧
請し、此村に大鳥居を立し故、其後村の名とす。

○椎木淵

大鳥居村の西、太閤水の東北にあり。大松ありて、下
に椎木あり。其下は深淵なり。是洞海の中也。太閤水は、
小敷村の
所にしる
せり。

○庄^{しやうの} 江

大鳥居村の東にあり。北より流るゝ小川あり。洞海に入る。此邊に若松の方と、芦屋の方との潮境^{しほさかひ}あり。此處にて兩方より潮みち合。又兩方にひく。是外海^{そとうみ}の潮境^{しほさかひ}、逆見津^{さかみづ}のとほりなり。又むかし此東に子忘の橋とて、陸路の方より、島郷の方にかけてし橋あり。洞の海にわたせり。今はなし。近き所まで、橋くひはなほ残りしと云。今は陸路の方より、島郷の方にわたせる橋一所もなし。

○皇后淵

海士住村と庄の江との間にあり。此内海は、神功皇后の通り給ひし所なれば、此所にも皇后の御船をとめられしにや。

○有^{あり}毛^け野

有毛村の海邊にあり。東西十三町五十間、南北十二町卅間あり。是放鷹^{やうぎ}の地なり。林木なし。此所の山に、花ことなる百合草^{ゆりぐさ}あり。うるはし。

筑前國續風土記卷之十五終